

「徐霞客遊記」のテキストについて

薄井俊二 埼玉大学教育学部言語文化講座国語分野

キーワード：徐霞客遊記、徐霞客遊記の版本、徐霞客遊記の抄本

1. はじめに

「徐霞客遊記」のテキストは、崇禎14年(1641)の彼の死後、長らく抄本(写本)の形で伝承され、始めて刊行されたのは、乾隆41年(1776)であった。その後は乾隆刊本をもとにした翻刻がなされたが、1928年に、丁文江が精密な校勘を加えた活字版を刊行して後は、この丁文江本が基礎テキストとされた。しかし、1980年に、褚紹唐と呉応寿が、新たに発見された抄本をもとにした校注本を上海古籍出版社から刊行し(上海新整理本)、現在はこれを底本とする。

本稿は、こうした「徐霞客遊記」の諸本について、その概略をまとめるものである。

2. 抄本

「徐霞客遊記」の現存する諸抄本は、一部を除き、中国の図書館所蔵か私蔵で、実物を見るのが困難である⁽¹⁾。そこで、抄本時代のものについては、先行研究をまとめる形で記す⁽²⁾。抄本の有り様を記す文献としては、諸本の序文や跋文があるが、乾隆年間に陳泓が「諸本異同攷略」(以下「攷略」という、その時点での諸本について記したものがあ

なお、現在では「徐霞客遊記」は、ひとつの本としてまとめて捉えられているが、「遊天台山日記」から「遊恒山日記」にいたる17篇の諸名山の遊記(「名山日記」と、「浙遊日記」から「滇遊日記」に至る4年間に及ぶ中国西南地域の遊記(「西南遊日記」とは、分量や内容にかなりの違いがあるが⁽³⁾、その成立でも事情を異にする。

いずれも旅先で綴られたノートのごときものを、後に編集整理してできたものであるが、前者は旅を終えて郷里へ帰還した後、その都度、徐霞客自身の手によって編集整理され、書き記されたものと判断される。つまり文章は、撰者徐霞客自らが推敲をし、まとめたものである。この点で、「名山遊記」は、安定したテキストであると言える。

しかし後者は不安定なテキストであった。長い旅を終え、雲南から郷里に帰還した徐霞客は、病気で体が弱っており、自分自身で遊記の文章を編集整理する力が残っていなかった。膨大な量であることもそれを難しくしたであろう。そこで編集整理を知人に依頼することになった。しかもその整理原稿が完成する前に、徐霞客は逝去してしまった。つまり「西南遊日記」は、撰者自身である徐霞客の目を経てまとめられたものではないのである。この点、このテキストは大元から不安定性を帯びざるを得ない。さらに、書写される過程で、誤写や脱落などのマイナスの改変が生じる。漢人の士人になじみの薄い、西南地域の地理情報であれば、なおさらである。「文意」を理解することなく、ただ書写したところが少なからず生じてしまう。そうした蕪雑な抄本を校訂しようとする、意味不明なところを削除したり、大意をまとめるなど、「縮小」の方向に進まざるを得ない。「遊記」の抄本段階での伝承は、こうした「蕪雑抄本の作成→校訂して縮小」という形が繰り返さ

れてきたものと思われる⁽⁴⁾。この点でも、「西南遊日記」は、不安定なテキストであると言える。抄本段階では、「名山遊記」と「西南遊日記」とを一応分けて捉えるものが多いが、その形の方が「原型」に近いものであろう。

2-1. 概略

西南遊の最終年の崇禎13年（1640、徐霞客55歳）、徐霞客は雲南麗江で重い足の病に罹る。土知府木生白から依頼されていた「鷄足山志」は、おそらく梗概をまとめたレベルのものだったのだろうが、同年3月に一応完成。その後、歩行もままならず、輿と舟でようやく郷里へ帰り着く。同年の6月であった。このときに、「西南遊日記」の素材となる、膨大な下書を持ち帰ったものと思われる。

その後、病のため、体力気力共に欠け、「遊記」の編集整理を知人である季夢良に依頼する。しかしその仕事が進まないうちに、翌14年（1641）正月、徐霞客は死去する。その後季夢良は、下書きを知人の王忠紉にゆだねると、王はまずまずの編集をした原稿を返してきた。そこで季夢良はさらに編集を加え、出版原稿レベルの浄書した抄本を完成させた（季会明整理本）。崇禎15年のことだった。

ところが、出版に至る前に、明清交替の戦乱が江陰にも及び、順治2年（1645）7月に徐霞客の郷里も戦禍に罹り、「遊記」の原稿は散失してしまう。長子の徐妃はじめ、霞客の家族の多くが命を落とした。その後「遊記」の原稿は、おそらく季夢良自身の手によって蒐集され、ほぼ回収できたものの、「滇遊日記一」のみは、ついに亡失してしまった。その後、季会明整理本の重抄本が作られたが、それは体裁や全体のトーンはかなり忠実に継承しているが、文字の乱れが多い、倉卒につくられた抄本であった。その一部が今に伝わるが（季会明残抄本）、のちの抄本につながるものではなかった。季会明整理本の本体は、その後散佚している。

その後、おそらくほど遠くない時点で、同里の曹駿甫という人物が季夢良から整理本を借りて、抄本を作成した（曹駿甫抄本）。この抄本は、分量も少なく、文字の誤りが多く、できがよくなかったらしい。曹家に伝えられたが、今は伝わらない。

その後、やはり同里の史夏隆という人物が、康熙5年（1666）に曹駿甫抄本を入手、校訂を加えた抄本を、同23年（1684）に完成させる（史夏隆抄本）。史は同24年（1685）に、この抄本を徐霞客の妾子である李寄に寄贈している。史夏隆抄本本体は伝わらないか、この重抄本が、のちの諸抄本の元となる。

少し遡るが、康熙元年（1662）、徐霞客の長孫の徐建極が、家蔵の抄本を江南督学の劉木斎という人物に寄贈している（徐建極本）。これも体裁や全体のトーンについて季会明整理本をかなり忠実に継承しているものと思われる。ただし、徐建極本そのものは散佚し、その抄本の一部が残されている。この抄本も、のちの抄本づくりにつながることはなかった。

李寄に話をもどす。彼は66歳のときに、史夏隆から抄本を受け取ったが、さらに校訂を加え、欠である「滇遊日記一」の部分に、補遺として「遊太華山記」「遊顔洞記」「盤江考」を置いた抄本を作成した（李介立本）。李寄の没年は康熙31年（1690）であり、抄本作成は、受領から5年の間のことであろう。

康熙41年（1702）、同里の奚又溥という人物が、徐建極の息子から抄本を借り、翌康熙42年（1703）に書写を終えている（奚又溥本）。その内容は、徐建極本ではなく、李介立本とほぼ同じであったという。この抄本も伝わらないが、編目が攷略に全文残されている。さらに奚又溥本の重抄本が

康熙年間に存在し、現在無錫文庫という叢書に影印復刻されている。

康熙48年(1709)、外舅劉南開の手抄本を見た楊名時は、自ら抄本を作成する(楊名時抄本一)。しかし、それが蕪雜であることに気づいた楊名時は、康熙49年(1710)に、友人の所有する「原本」に基づき「校訂」を行い、別の抄本を作成した(楊名時抄本二)。

乾隆年間に入り、陳泓は遊記の諸本を収集整理し、伝承しているテキストを概説した「諸本異同攷略」を著述した。あわせて遊記の抄本も作成した(陳泓抄本)。このテキストは現存する。

さらに遊記は四庫全書にも収録されるが、それは楊名時抄本を下敷きにしたものであった。四庫全書本は様々な影印出版本がある。

2-2. 各抄本

①1. 季会明整理本(季本一)

本は伝わらない。

「攷略」「①2季本残抄本」附載の序文(「季序」)によれば、最初の抄本。

季夢良、字は会明。霞客の長子⁽⁵⁾の徐妃が「吾師」と呼んでいることから、徐家の家庭教師的な存在であったと考えられる。また季夢良自身は自らを徐霞客の「友弟」と称している。生没年不詳。

崇禎13年(1640)に西南遊から帰郷した徐霞客は、季夢良に、日記が「散乱無緒」⁽⁶⁾の状態にあるので、「理而輯之」することを求めた。季夢良は引き受けるが、仕事が進まないうちに、翌年(1641)徐霞客は逝去した。そののち、徐霞客の友人である王忠紉⁽⁷⁾が原稿を預るが、やがて王は福州に赴任することになり、原稿を徐家に返してきた。季夢良が調べてみると「一一經忠紉手較、略爲叙次(全体を通して王忠紉のチェックを経ており、おおむね順序立てられていた)」と、まずまずの編集整理がなされていた。しかし「猶多殘闕」だったため、季夢良自身の手で「遍蒐遺帙、補忠紉之所未補」して、「因地分集、録成一遍(土地に因って編集し、一遍の書物として完成させた)」した。崇禎15年(1642)12月望日のことであった。さらに「俟名公刪定、付之梓人」とあり、出版原稿レベルの、整った浄書であったことがわかる。しかし本抄本が版に付されることはなかった。

いま遊記は、「滇遊日記」巻一を欠く。「滇遊日記」巻一にあたる部分に付されている季夢良の注によれば、明福王2年(1645、清順治2年)7月、明清交替の戦乱の中で、季夢良の宗人である季楊之が「滇遊日記」一冊を借り出していたところ、避難先の徐虞卿(霞客の兄弘祚の次子である、亮工。虞卿は字、また虞欽)が「盜」に襲われて家ごと焼失してしまった⁽⁸⁾。季夢良が編纂した遊記本体も一旦ちりぢりになり、ようやく回収したが、「滇遊日記」巻一は、遂に見つからなかったという。

この抄本は、「攷略」が「未見」というように、その後散佚した。

①2. 季本残抄本(季本二)

北京図書館蔵。

書名は「徐霞客西遊記」で、五冊。28万字あまりを収録する。日記の日時は、崇禎9年9月19日から同11年3月27日まで。第一冊が浙遊と江右遊に、第二冊が楚遊に、第三～五冊が粵西遊にあたる。篇首に「季序」があり、各冊の頭に、旅程の概要と「友弟季夢良会明甫校録」の文字が記されている。

このテキストは、後述する最初の刊本である乾隆刊本とかなり内容が異なっているが、徐霞客遊記の本来の姿をよく留めているものとされる。その理由は、(1)「乾隆本が随所で総合的な記述になっているのに対し、全体を通して『日記体』であること」、(2)「乾隆本よりも記述が詳細な部分が多くあること」、(3)「霞客の旅の生活の記録が、乾隆本よりも遥かに詳細で具体的であること」である。そこから、①こそ「遊記の原始抄本」であろうと判断される（上海新整理本前言）。

また「虞山毛晉」「汲古後人」「吳興劉氏嘉業堂藏書記」などの印章が押されている。ここから、汲古閣などの收藏を経て、最後は劉承幹の所蔵となったものと推測される。朱惠榮はさらに、汲古閣に入ったのは、徐霞客の族兄である徐仲昭⁽⁹⁾を経由して、友人である錢謙益がはからったのではないかとしている。

劉承幹は、1882～1963。原籍は浙江上虞だが、祖先が康熙年間に吳興県南潯に移り、以来そこに住んだ。承幹は、清末から散佚した書籍の蒐集を始め、民国以後は上海を基点にしてさらに蔵書を増やした。そして、民国12年（1923）に南潯に蔵書楼を建て「嘉業堂」と称した。その「嘉業堂鈔本書目」に「徐霞客遊記、不分卷……舊鈔本五冊、東吳毛氏・莫邵亭藏」とあり、①②に付されている印章と一致している。劉承幹の所蔵から北京図書館収蔵への経緯は明らかではないが、彼の没年の1963年と、①②の存在が明らかになった1976年とは、わずか13年の間しかない。このあたりで授受が行われたのではないか。

②. 曹駿甫抄本

本は伝わらない。

曹駿甫は、未詳。「瀕遊日記一」附載の季夢良注では「義興庠友（学友）曹駿甫」、「攷略」に引く季会明注では「宜興曹駿甫」とある。上海新整理本の校勘記では、いずれも江蘇省宜興県を指すとする。

曹駿甫も遊を好み、徐霞客を慕っていたが、その死去を知り、墓参りに訪れている。のち、季夢良から原稿を借り、書写したらしい。しかし、「史夏隆（後述③）序」では、彼が曹駿甫抄本を得たところ、「四冊」のみで、「草塗蕪冗、殊難爲觀（乱れて読みにくい、の意味か）」だったという。「攷略」も、李寄（後述）が宜興の史氏から曹駿甫抄本を得たところ「僅四冊耳」だったということから、「駿甫所録、已非全書」という。かなり早期の抄本であるが、全文ではなく、文字の乱れも少なくないテキストであったらしい。

史夏隆の手に渡ったのは、清朝康熙5年（丙午、1666）のことで、徐霞客没後、25年後であった。⁽¹⁰⁾その後、散佚。

③. 史夏隆抄本

本文は伝わらないが、序文が残る。それによれば、滬濱の人。滬濱は江蘇省武進県にある湖で、太湖につながる。これは出身地ではなく、この地で序文を記した、の意味かもしれない。他は不詳だが、「霞客一生心血、走筆成書、五十年後、予爲脱稿」とあり、抄本の完成は、霞客の死後「50年後」となる。これは概数で、おそらく李寄に抄本を進呈した甲子（康熙23年、1684）よりやや前のことであろう。そうであれば、霞客没後「33年」ということになる。さらに、「今歳72」とあれば、その生年は、万曆41年（1613）ということになる。徐霞客とほぼ同世代である。

徐霞客の生前に交友があったかどうかは不明。「史序」により、由来などをまとめると、彼はかねてより遊記を欲していたが、同里の曹氏が所有していたのを、康熙5年に入手。しかしテキスト

として蕪雜だったため、「抄訂」をほどこしながら、四分の一ほど書写したが、そこで中断。それから21年あまり放置していたが、康熙22年頃に友人の助けを借りながら抄録を再開し、翌年72歳のときようやく完成した。

その後徐霞客の子孫に贈呈しようとして、児輩を澄江（江陰）に訪ねさせたが、その子孫は分からなくなっていた。そこへたまたま吳天玉という友人が訪ねて来て、徐霞客の息子で、今は李姓のもの（李寄）がいることを知らされ、清和月（4月）に、無事にこの書を寄贈することができた、という。序文の成書は、史夏隆73歳の翌年。

④1. 徐建極抄本

徐建極は、徐霞客の長子である妃の長子。『徐霞客家伝』⁽¹¹⁾に伝記があり、繆誥「廩彦范中公伝（公伝）」を収録する。繆誥は、徐霞客と親しかった繆昌期の一族。

字は五徴、号は范中。崇禎7年（1634）の生で、康熙32年（1692）没。

公伝によれば、建極が生まれたとき、徐霞客の友人である、黄道周ら五名の翰林学士がお祝いに訪れたので、徐霞客はたいそう喜び、建極のことを「五翰」と呼んだという。徐霞客は、足を病んで雲南から帰ってからは、持ち帰った大理石や奇木を撫でめでる日々だった。そのおり、しばしば建極に、大志を持つことを説いたと言う。建極も幼いながらに「青雲の志」を抱いた。しかし霞客が没してまもなく、明清交替の戦乱が江陰に及び、父の徐妃は順治2年（1645）に没する。徐建極は、12歳であったが、難を逃れた。その後、徐家は零落するが、意気盛んで勉学に励み、ついに「廩庠生（官費学生）」となった。しかし、順治18年（1661）に起こった「江陰奏銷」事件⁽¹²⁾に関連して逮捕投獄され、前途を失うこととなった。28歳のときであった。その後は、詩文の作をなぐさめとし、在野の士で終わった。

公伝によれば、「江陰奏銷」事件の翌年（康熙元年、1662）、錢謙益の「徐霞客伝」（「初学集」所収）を読み、「心艶之（徐霞客を慕っていた）」劉木斎が、督学として江南を訪れる。霞客の子孫を捜して「記遊之書」を求めたため、徐建極は、徐霞客が雲南から持ち帰った大理石とともに「抄本」を劉公に献上した。劉公は喜び、建極を学校へ復帰させ、家を盛り返そうと申し出たが、建極は既に科挙の業をあきらめていたという。ここから、康熙元年には、徐建極は徐霞客遊記の抄本を所持していたこと、それが劉公に献上されたことが分かる。

その後の抄本の行方は不明だが、鄭珂氏の所蔵の抄本（④2）が、その重抄本であると言われる。

④2. 徐建極残抄本

鄭珂氏私蔵。

現存本は、書名は「遊記」とのみ記される。第六冊・第八冊・第九冊・第十冊が残るが、第九冊と第十冊は、上下に分巻しており、全六冊。各冊の第1頁に「孫建極録」の四文字が署されており、徐建極抄本の流れを汲むものとされる。

①季会明抄本同様、提綱がある。第六冊は、原題は「黔」で、今の「黔遊日記」にあたる。第八冊以降はすべて、原題は「滇」。第八冊は「滇遊日記二」「同三」「同四」「同五」に相当する。第九冊上は「滇遊日記六」及び「滇遊日記七」の前半、第九冊下は「滇遊日記八」と「同九」に相当。第一冊上は「滇遊日記一」と「同十一」に、第一冊下は「滇遊日記十二」と「同十三」に相当する。すなわち、季会明本で欠いていた遊記の後半をほとんどカバーしている。

ただし、朱恵榮は、両抄本の共通部分である「崇禎11年3月27日」条において、両抄本に文字

の異同が見られることから、ひとつの抄本がふたつに分かれたのではなく、別々のものであると判断している。記述は詳細で、乾隆刊本よりも、季会明本に類似する。また、欠けている第七冊は、「瀕遊日記一」にほぼ相当しよう。こうしたことから、④1徐建極抄本は、徐霞客遊記原本から写したか、①1季会明整理本から写したものと判断される。しかし、現存する鄭珂氏私蔵本には文章の過誤が少なからず見られることから、徐建極抄本そのものではなく、重抄本ではないか、と考えられる。

⑤. 李介立抄本（李寄本）

本は伝わらない。

李寄、字は介立。明万曆47年（1619）から清康熙31年（1690）。「徐霞客家伝」に、「〔光緒〕江陰県志」巻十八・人物・行宜伝の「李寄伝」、徐敬承撰「高士介立公伝」（「民譜」）、徐鎮撰「李介立先生小伝」（「徐霞客遊記」附篇）、自著「崑崙山樵伝」（「天香閣隨筆」附録）が収録されている。

母親は周氏で、徐霞客の側妻だったが、寄を妊娠したまま他家（李某）へ嫁いだ。李寄は嫁ぎ先で生まれ、育てられた。他家での養育なので「寄」と名づけられ、ふたつの姓にまたがり、またふたつの王朝を経たので、自ら「介立」と名のつたという。また「李介」とも称す。

幼いときより博学能文で、郡での童試に応じると「第一」だったが、学問で禄利を得ることをよしとせず、終生隠栖生活を送った。文人との交わりは盛んに行い、多くの詩文や著述を残しているが、刊行に至ったものはない。著に「天香閣文集」（「筆記小説大観」所収）、「歴代兵鑑」「輿図集要」などがある。

「史序」によれば、康熙23年（1684、李寄66歳）に、史夏隆は、校訂を終えた「徐霞客遊記」を李寄に進呈している。「攷略」によれば、李寄はその本に欠落や文字の誤りがあることから、積年苦心して更に補訂につとめた。「瀕遊日記一」を補うものとして「遊太華」「顔洞」「盤江考」の三記を遊記に入れたのは、李寄であるという。また「遊記」中で、「下缺」など、氏名を記さずに施されている「注」は、李寄のものだという。

乾隆刊本が元とした、⑥奚又溥本が、全面的にこの李介立抄本によっていることから「諸本の祖」とされるが、抄本そのものは散佚して伝わらない。

⑥. 奚又溥抄本

本は伝わらない。

奚序に「同里後学」とあれば、江陰の人。あとは未詳。

康熙41年（1702）冬に、徐建極の子である徐曾起（字、覲霞）から抄本を借り、五ヶ月掛けて書写し、同42年（1703）4月に完成したという。借りた抄本は、「攷略」によれば、⑤李介立本、もしくはその写本である。「李介立本とわずかな違いはあるが、ほぼ同じ」という。

この抄本も伝わらないが、「攷略」が編目を全て収録している。全一冊。上海新整理本で小字の自注は〔 〕で示す。

[第一本]

徐霞客伝 [附嘱仲昭刻遊記書⁽¹³⁾]

奚又溥序

名山遊記

遊天台山日記 遊天台山後記 遊雁宕山日記 遊雁宕後記 遊白岳日記 遊黄山日記 遊黄山後記 遊武彝山日記 遊廬山日記 遊九鯉湖日記 遊嵩山日記 遊太華山日記 遊太和田日記 遊五臺山日記 遊恆山日記 閩遊日記 閩後遊日記（「名山遊記」に相当）

[第二本]

西南遊日記一〔自崇禎九年初九日、至十年正月初十日。〕（「浙遊日記」、「江右遊日記」に相当）

西南遊日記二〔自十年正月十一日、至閏四月初七日。〕（「楚遊日記」に相当）

[第三本]

西南遊日記三〔自閏四月初八日、至六月十一日。〕（「粵西遊日記一」に相当）

西南遊日記四〔自六月十二日、至七月二十日。〕（「粵西遊日記二」前半に相当）

西南遊日記五〔自七月二十二日、至八月二十一日。〕（「粵西遊日記二」後半に相当）

[第四本]

西南遊日記六〔自九月二十二日、至十二月二十四日。〕（「粵西遊日記三」、「同四」前盤に相当）

西南遊日記七〔自十二月二十五日、至十一年二月十七日。〕（「粵西遊日記四」中盤に相当）

西南遊日記八〔二月十八日、至三月二十七日。〕（「粵西遊日記四」終盤に相当）

遊黔日記一〔自二月二十七日、至四月十九日。有提綱。〕（「黔遊日記一」にほぼ相当。攷略は、提綱に記されていたと思われる、この巻の訪問地を列記する）

遊黔日記二〔自八月初八日、至五月初九日。〕（「黔遊日記二」にほぼ相当）

[第五本]〔卷首有季会明・曹宸采小記⁽¹⁴⁾。〕

遊滇日記二〔自八月初七日、至二十九日。有提綱。〕（「滇遊日記二」に相当。攷略は、提綱に記されていたと思われる、この巻の訪問地を列記する）

遊滇日記三〔自九月初一日、至二十九日。〕（「滇遊日記三」に相当）

[第六本]

遊滇日記四〔自十月初一日、至二十九日。〕（「滇遊日記四」前半に相当）

遊滇日記五〔自十一月初一日、至十二月三十日。〕（「滇遊日記四」後半、「同五」に相当）

[第七本]

遊滇日記六〔自十二年正月初一日、至二十九日。有提綱。〕（「滇遊日記六」に相当。攷略は、提綱に記されていたと思われる、この巻の訪問地を列記する）

遊滇日記七〔自二月初一日、至二十四日。〕（「滇遊日記七」に相当）

[第八本]

遊滇日記八〔自三月初一日、至二十九日。〕（「滇遊日記八」に相当）

遊滇日記九〔自四月初十日、至二十九日。〕（「滇遊日記九」に相当）

[第九本]

遊滇日記十〔自五月初一日、至三十日。有提綱。〕（「滇遊日記十」前半に相当。攷略は、提綱に記されていたと思われる、この巻の訪問地を列記する）

遊滇日記十一〔自六月初一日、至二十九日。〕（「滇遊日記十」後半に相当）

遊滇日記十二〔自七月初一日、至三十日。附永昌志。附近騰諸彝説略。〕（「滇遊日記十一」に相当）

[第十本]

遊滇日記十三〔自八月初一日、至二十九日。〕（「滇遊日記十二」に相当）

遊滇日記十四〔自九月初一日、至十四日。有季会明小記⁽¹⁵⁾。〕（「滇遊日記十三」に相当）

雞山志目 雞山紀略 雞山各利碑略 麗江紀略 法王緣起 遊顏洞記〔原註云、「以下兩則、

係滇遊日記一中、因原本缺首冊、附録於此。』 遊太華山〔附滇中花木小記。〕 溯江紀源〔原註云、
「刻本邑馮志・靖邑陳志中。有小引。」⁽¹⁶⁾〕 盤江考 隨筆二則(以上、上海新整理本では附篇に収録)

⑦. 葉葺楊序本

上海図書館蔵。無錫文庫所収。

全一冊。

冒頭に錢謙益の二文があること、名山遊記の順番も閩遊日記が最後にあること、黔遊日記が一篇であること、西南遊日記の配置、溯江紀源などへの割注など、内容は⑥奚又溥抄本に酷似する。

⑥の重抄本であることは間違いがなく、乾隆刊本以前の遊記の姿を示す重要な資料である。

相違点は、奚序がなく、二つの楊序が掲載されていること。西南遊滇日記の一～三を欠く。また無錫文庫本は、西南遊滇日記四・五が西南遊日記五と六の間にはさまれている。これはもともとそうであったのか、無錫文庫へ刻入する際に誤ったのか、不明。

「麗江紀略」のうしろに、下記の書き込みがある。

「霞客徐君所著遊記卷帙甚煩。熟聞而未見。茲于乾隆癸卯歲三月廿有三日、偶向書賈問及、遂獲此抄本。大愜素志。但思抄是徧省煞費苦心慘淡經營、非半載不能辨。予則安享其成、所費又不多。豈不大。卒然戒謹恐懼之念由此而生。識其歲月以永不忘。改亭淪子記。」

これによれば、「改亭淪子」なる人物が乾隆48年(1783)に購入したという。抄本の版心に「蔬香亭清課」とあり、この「蔬香亭」が号であろうが、この人物は不詳。

巻首に葉景葵の題記がある。それによれば、民国24年(1935)と29年(1940)にこの抄本を校閲したという。葉景葵は、同治13年(1874)から中華民国38年(1949)。字は揆初、号は巻盒。浙江省杭州府仁和県の人で、光緒29年(1903)の進士。清末から民国にかけて、財政や商業鉅業の重要性を認識し、活動。興業銀行の経営などに従事した。晩年は古籍の蒐集につとめ、その蔵書は上海図書館に寄贈された。

無錫文庫は、無錫に関わる古典籍をリプリントしたもので、2011年に鳳凰出版から刊行されたもの。第四輯《無錫文存》の一部として、徐霞客遊記が採録されており、この抄本を採用している。

⑧1. 楊名時抄本一

本は伝わらない。

楊名時は、順治18年(1661)生で、乾隆2年(1737)没。徐霞客と同郷の江陰の人で、字は賓實、又の字は凝齋。諡は文定。康熙31年(1691)の進士で、雲南巡撫や雲貴総督をつとめ、治績をあげた。雍正帝期に誣告され、職を失ったが、乾隆元年に召還され、皇太子に侍るに至り、官は吏部尚書に至った。西南方面で長くつとめ、この地に詳しかったといわれる。御纂「周易折中」「性理精義」の編纂に関わる。自著としては「周易割記」「詩經割記」「四書割記」(いずれも「四庫全書」所収)があり、これらを含む「楊氏全書」36巻がある。また「自滇入都程記」一卷(「小方壺齋輿地叢書」所収)は、雍正13年(1735)11月25日に雲南府昆明から出発し、乾隆元年(1736)2月14日に北京へ至る間の、旅行日記である。

楊名時の抄本はふたつある。康熙48年(1709)夏、江陰から淮浦までの船旅の暇をつぶすために、外舅の劉南開が書写した「徐霞客遊記」を読み、たいそう気に入、「手録而存之、凡兩閱月而畢」。そして、同年8月に、序文(「楊序一」)を書いている。ここでいう「淮浦」が、今の江蘇省淮安市漣水轄区の古名だとすると、江陰との距離は250km程度。遊記の記事から計算すると、船

旅での移動距離は、1日30km程度で、江陰～淮浦間は、片道8日から9日である。上海新整理本の「遊記」は60万字を超えており、10日あまりで読み通すことはできないのではないか。ここから劉南開の抄本は、遊記全文ではなく、節録ではなかったかと推測される。また、後に書いた「楊序二」によれば、「出於宜興史氏」で、この本は「字多譌誤」、削ったり置き換えたりしているところがあって元の姿とは符合せず、文意も通らないところがあったという。

⑧2. 楊名時抄本二

北京図書館、南京図書館蔵。

遊記の手録を終え、九月に家に帰ると、楊名時は友人が所蔵している遊記の「原本」を見ることになった。そこで先の抄本が不完全なものであると気づき、改めて「爲改正添入、再手謄一過、以復其舊（文字の改正と追加を行い、再びきちんと書写して、遊記の元の姿の復元）」を行った。それが成り、康熙49年（1710）に序文を書いている（「楊序二」）。

「四庫全書総目提要」は、楊名時抄本の内容を紹介している。これによれば、第一巻が天台山からはじまり、華山におわる、名山遊記で、数篇。第二巻以降が西南遊記で、浙江江西で1篇、湖広で1篇、広西で6篇、貴州で1篇、雲南で16篇、合計25篇あったことになる。

楊名時抄本は、北京図書館と南京図書館所蔵のものがあるが、北京図書館所蔵本について、唐錫仁も褚紹唐も、文の誤りや脱漏が多く、文字も草々としていることから、楊名時自身の抄本ではなく、これを入手した、例えば趙季方などの手になる重抄本ではないか、という。

北京図書館本の内容は次の通り。8冊、21巻、25篇。タイトルは「徐霞客遊記」。

巻首に、ふたつの「楊序」があり、毎冊首に「季方蔵書」「史天」「霞門後学」の印章、書末に「京師広東学堂蔵書」の印章がある。

[第一冊]

楊序一 楊序二 巻一 天台茶名山十七篇

[第二冊]

巻二：西南遊一（浙江、江西）。西南遊二（湖広）。

巻三：西南遊三、四、五（広西）

[第三冊]

巻四：西南遊六、七、八（広西）

[第四冊]

巻五：西南遊九（貴州）。西南遊十（雲南）（缺）季会明小記一則。

[第五冊]

巻六：西南遊十一、十二（雲南）

巻七：西南遊十三、十四（雲南）

[第六冊]

巻八：西南遊十五、十六（雲南）

巻九：西南遊十七、十八（雲南）

[第七冊]

巻十：西南遊十九、二十、二十一（雲南）

[第八冊]

巻十一：西南遊二十二、二十三（雲南）

卷十二：西南遊二十四、二十五（雲南）

⑨. 楊名寧抄本

華東師範大学図書館蔵。

楊名寧は、楊名時のいとこ。楊名時の幕僚となったこともあり、山西徐溝県の知県をつとめた。おそらく楊名時抄本の重抄であろう。

朱恵栄は「未見」という。編目は次の通り。

[第一冊]

楊名時二序

名山遊記十七篇 盤江考 溯江紀源

[第二冊]

西南遊日記一、二

[第三冊]

西南遊日記三、四、五、六

[第四冊]

西南遊日記七、八

[第五冊]

西南遊黔日記（有提綱） 西南遊滇日記一（缺） 遊太華山・遊顔洞記 西南遊滇日記（有提綱）（自八月初七日至二十九日）

[第六冊]

西南遊滇日記（有提綱）自九月初一日、至二十九日（十一月初一日至三十日、十二月初一日至三十日。）

[第七冊]

西南遊滇日記（有提綱）己卯正月初一日至二十九日、自二月初一日至二十四日）

[第八冊]

西南遊滇日記（有提綱）自三月初一日至二十九日。自四月初十日至二十九日）

[第九冊]

西南遊滇日記（有提綱）（自五月初一日至三十日、自六月初一日至二十九日、自七月初一日至三十日）
附永昌志 近騰諸彝述略

[第十冊]

西南遊滇日記（有提綱）（自八月初一日至二十九日、自九月初一日至十四日）附 雞山志目 雞山志略 各刹碑記 麗江紀略 法王緣起

⑩. 陳泓抄本

上海図書館蔵。

陳泓は、字は体静。江陰の人。他は不詳。「攷略」の他「書手鈔霞客遊記後」もある。それによれば、「吾邑有三書」として、王梧溪の「詩集」、黄蘭の「邑志」とともに徐霞客の「遊記」をあげる。遊記については「校対数次」で、融郊師の訂正を経て「完好」ものになったという。そのテキストを書写したものだろう。遊記の随所に注記を残すほか、「溯江紀源」にも注記をしている。

この抄本作成の時期について、朱恵栄らは、乾隆年間という。

卷首、第一巻から第十巻は「西南遊日記」と表記、巻末からなり、全十二冊。
 卷首 「附嘱仲昭刻遊記書」「徐霞客遊記総目」「名山遊記十七篇」。
 卷一 西南遊日記一（浙江、江西）。西南遊日記二（湖広）。
 卷二 西南遊三、四、五（広西）
 卷三 西南遊六、七、八（広西）
 卷四 西南遊日記九（貴州）。西南遊十（滇遊）（缺）遊太華山記 顔洞記 滇中花木記及隨筆二則
 卷五 西南遊日記十一、十二（滇遊二、三）
 卷六 西南遊日記十三、十四（滇遊四、五）
 卷七 西南遊日記十五、十六、十七（滇遊六、七、八）
 卷八 西南遊日記十八、十九、二十、二十一（滇遊九、十、十一、十二）
 卷九 西南遊日記二十二、二十三（滇遊十三、十四 永昌志略 近騰諸彝述略）
 卷十 西南遊日記二十四、二十五（滇遊十五、十六 雞山志目 麗江紀略 法王縁起）
 卷末 徐霞客や友人の詩 黄道周からの書簡 陳函輝「徐霞客墓志銘」 錢謙益「徐霞客伝」 各種序跋 諸本異同攷略 他

⑪. 四庫全書本

四庫全書の完成は、乾隆47年（1782）7月。「四庫全書総目提要」によれば、史部十一地理類九遊記之属。他の遊記は、宋張礼「遊城南記一卷」と「河朔訪古記二卷」。十二巻の「徐霞客遊記」が、分量では圧倒する。「両江総督採進本」とあり、楊名時のふたつ目の抄本をもとにしているという。

文淵閣本によれば、巻頭に、楊序一が置かれる他は、序跋や附録の類はない。遊記本文構成は下記の通り。

卷一上：名山遊記 後遊黄山日記まで
 卷一下：名山遊記 遊九鯉湖日記から
 卷二上：西南遊日記一 浙江・江西
 卷二下：西南遊日記二 湖広
 卷三上：西南遊日記三 広西
 卷三下：西南遊日記四 広西
 卷四上：西南遊日記五 広西
 卷四下：西南遊日記六 広西
 卷五上：西南遊日記七 貴州
 卷五下：西南遊日記八 貴州（記遊太華山、記滇中花木、記遊顔洞）
 卷六上：西南遊日記九 雲南（崇禎十一年八月）
 卷六下：西南遊日記十 雲南（同九月）
 卷七上：西南遊日記十一 雲南（同十月）
 卷七下：西南遊日記十二 雲南（同十一月）
 卷八上：西南遊日記十三 雲南（同十二月二十八日まで）
 卷八下：西南遊日記十四 雲南（同二十九日～崇禎十二年一月二十日）
 卷九上：西南遊日記十五 雲南（同二十一日～二十九日、二月初一日～十二日）

- 卷九下：西南遊日記十六 雲南（同十三日～三月二十日）
 卷十上：西南遊日記十七 雲南（同二十一日～二十九日、四月十日～十五日）
 卷十下：西南遊日記十八 雲南（同十六日～二十九日）
 卷十一上：西南遊日記十九 雲南（同五月初一日～六月二十六日）
 卷十一下：西南遊日記二十 雲南（同七月初一日～三十日）
 卷十二上：西南遊日記二十一 雲南（同八月初一日～十八日）
 卷十二下：西南遊日記二十二 雲南（同十九日～九月十四日）

名山遊記は楊名時本と同じ篇構成だが、西南遊日記は、篇構成が楊名時本と若干異なる。広西は、楊名時抄本では6篇だが、四庫全書本では4篇。貴州は、楊名時抄本では1篇だが、四庫全書本では2篇。雲南は、楊名時本では、缺1篇を除くと15篇だが、四庫全書本では14篇。西南遊日記全体では、楊名時本では25篇だが、四庫全書本では22篇。なお、総目提要は、楊名時本と同じ数値をあげる。文淵閣本によれば、総目提要の校了は乾隆45年（1780）5月。あるいは総目提要を記した段階では、楊名時本の編目を記し、遊記本文を転写する段階で、編目の変更が行われたのかもしれない。

朱恵栄は、四庫全書本は「文字順暢」で「内容完整」なことは、史本のような抄録本ではないとする。また提綱などが省かれていること、西南遊日記の特に前半部分に大幅な削除がなされていることを指摘している。

四庫全書本は、「山川風情叢書」（上海古籍出版社、1993）他、多くの影印本が出ている。

⑫ 清代の、存在のみが伝わるその他の抄本

⑫1. 靖江楊天賜本

攷略に記事があるのみで、伝わらない。

全12冊。第一冊が名山遊記で、第二冊から第十一冊が西南遊日記の部分。第二冊冒頭に史序がある。第四冊日記八下に、「盤江考」「遊顔洞」「遊太華山」がある。第十二冊が、詩文や錢謙益伝、陳函輝墓碑銘など。末尾に楊天賜の序。

朱恵栄は、全体の冒頭ではなく、第二冊の冒頭に史序があることから、⑤李介立本の流れをひくものだろうと推測している。

⑫2. 梧棲徐氏本

攷略に記事があるのみで、伝わらない。

本数編目は、奚又溥抄本に同じ。第一冊冒頭に錢謙益の徐霞客伝があり、ふたつの楊序を載せ、史序は削除されている。冒頭に徐霞客伝があるのは、⑥奚又溥抄本に同じ。⑥は⑤李介立本をほぼ踏襲していることから、この⑫2は、⑤李介立本の流れを受け、楊序を加えたものではないかと判断される。

この抄本の書き手は不明で、陳泓は徐氏から借りたので「徐本」と名付けたという。

⑫3. 邑中夏氏本

攷略に記事があるのみで、伝わらない。

全10冊。第一冊に錢謙益の徐霞客伝（「囑仲昭書」を附載）、史序、奚序、ふたつの楊序があつて、名山遊記が続く。第五本に「遊顔洞」「遊太華」を載せるが、「滇遊日記十四」で終わり、附録の散文は収録しない。⑥奚又溥本の流れを受け、楊序を加えて散文を省いたものではないか、と判

断される。

「装訂華美」で「字画亦佳」「少失脱」だが、「訛字極多」という。

この抄本の書き手は不明で、陳泓は夏仲明から借りたので「夏本」と名付けた、という。

⑫4. 史夏氏又一本

攷略に記事があるのみで、伝わらない。

「前後編次」は奚又溥本に同じだが、詩文一冊が加わっている、という。

⑫5. 奚氏又一本

攷略に記事があるのみで、伝わらない。

奚又溥が⑥抄本を作成後、さらに校訂を加えたもの。詩文の一冊が加えられているが、晴山堂石刻のものも含まれている、という。

⑫6. 趙本

攷略に記事があるのみで、伝わらない。

陳泓の友人が、「趙日宣の家に徐霞客遊記の原本がある」というので、喜んで見に行ったところ、原本ではなくて、趙氏の抄本であった。また、十分の四ほどが失われており、「遊記」とは呼べない、見るに値しないものであった、という。

⑫7. 劉南開本

楊序一に記事があるのみで、伝わらない。

劉南開は、楊名時の外舅。彼が書写した抄本で、楊名時抄本一で検討したように、節録本ではないかと推察される。

⑬. 清代の、伝承されているその他の抄本

⑬1. 清鮑氏知不足齋抄本

北京図書館善本特蔵書庫蔵。

全5冊。

第四冊に「知不足齋抄」の文字があることから、鮑廷博の手になる抄本であると思われる。また呉騫と唐翰の題辭がある。

鮑廷博は、雍正6年(1728)から嘉慶19年(1814)。字は以文、号は淥飲。安徽省歙県の人。嘉慶18年(1813)に、特に挙人を賜る。蔵書が多く「浙右第一」と称せられ、四庫全書作成にあたって、600余種を進めた。蔵書の中から貴重書を「知不足齋叢書」としてリプリント刊行した。

呉騫は、雍正11年(1733)から嘉慶18年(1813)。字は槎客、号は兔床または愚谷、海槎等。原籍は安徽省休寧で、浙江省海寧で育った。清代乾嘉年間の著名な蔵書家、学者。広く善本を収集し、蔵書楼「拜經楼」を建てて、翻刻本を多く世に出した。題辭には「嘉慶2年(1797)の紀年があり、文中で「三十一年前に、淥飲先生から『徐霞客遊記』を借りた」とあることから、鮑廷博による書写は、乾隆32年(1767)以前であったことがわかる。最初の刊本である「乾隆本」刊行(1776)の一年前である。

冒頭に「徐霞客伝」「囑仲昭刻遊記書」があり、名山遊記の最後が「閩遊日記」であるところは、⑥奚又溥抄本に同じであり、その流れの抄本ではないかと思われる。

⑬2. 韵石山房本

中国科学院図書館蔵。

全4冊。

冒頭に「韵石山房」の印章がある他は、書写者の情報はない。韵石山房も未詳。
内容は⑬1に類似し、やはり⑥奚又溥抄本系統ではないか。

⑬3. 史序本

上海図書館蔵。

列目は1冊だが、装丁は8冊。

冒頭に史夏隆序があるので、この名がある。陳函輝の「墓碑銘」があるが、錢謙益の「徐霞客伝」はない。

⑬4. 北大本

北京大学図書館蔵。

全8冊。

一紙上に「周鋹」の印章があるが、これが何を意味するのかわ不明。

楊名時のふたつの序文と遊記の本文からなり、附録類はない。

⑬5. 北図一冊本

北京大学図書館蔵。

全10冊、12巻、42篇。

楊名時の二序があり、楊名時本の流れを引くものではないかと思われる。

⑬6. 渾然本

南京図書館蔵。

全6冊。377頁で、およそ22万字。

「曾侄孫渾然最初手録」の署名があり、朱恵栄は、徐氏家蔵本で、比較的早期に書写されたものではないか、とする。

錢謙益の「徐霞客伝」から始まり、楊名時・奚又溥の序文があり、本文と附録がある。粵西・黔の部分は欠落しており、滇遊も一部を欠く。

⑬7. 台湾蔵本

台湾図書館蔵。

全12冊。

朱恵栄は、魏子雲の論文⁽¹⁷⁾から内容を紹介するが、未見という。

⑬8. 一冊残抄本

上海図書館蔵。

目次は12冊だが、貴州と滇四・五を欠き、1冊のみの残簡。

内容は⑪陳泓本に類似。

⑬9. 求是齋残抄黔遊記

上海図書館蔵。

一冊のみの残簡。71頁。

「求是齋」の印章があるが、不詳。

黔遊日記部分のみ。楊名時本の分巻と同じなので、その流れにある抄本だろう。

⑬10. 無名氏抄本

朱恵栄は「南京博物院王少華在原江蘇省文化局局長周邨家中発現。」と記す。

記録などはない。

3. 刊本

3-1. 概略

徐霞客遊記の刊本は、乾隆41年の、霞客の子孫の徐鎮によるものが最初であった。その後、この本をもとにして、嘉慶・咸豊⁽¹⁸⁾・光緒年間にそれぞれ木版刊本が作られ、光緒の末年には、線装本の活字刊本も作られた。

その後民国に入ると、線装本の石印版の他、校点を施した洋装本が作られるようになり、文人のみならず識字層であれば手軽に手に取って読めるようになった。ただしそれらの内容は乾隆刊本をほぼ踏襲するものに止まり、学術的な点ではレベルの低いものであった。

こうした状況を一步進めたのが丁文江の整理本であった。民国17年(1928)に刊行されたこの刊本は、本文に丁寧な校点に加えられた点で、テキストとしてより良質なものとなった。加えて、徐霞客家譜なども利用した詳細で正確な年譜と、地理地学者としての丁文江の力を注いだ地図が付された。これにより、時間的流れと空間的な広がりとを意識しながら遊記を読むことができるようになり、遊記の内容と価値を知る上で大きな前進を見た。時勢は戦乱に向かい、世情は騒然となりつつあったが、丁文江本は王雲五刊行の万有文庫などにも収録され、広く読まれることになり、遊記を対象とした学術研究も行われるようになった。

徐霞客遊記の学術的研究の嚆矢は、丁文江の年譜であろうが、その後、少しずつ研究者が現れるようになった。戦時下の1941年、浙東大学の竺可楨らは、疎開先の貴州遵義で「徐霞客逝世三百周年記念会」を開催した。十名以上が口頭による研究発表を行い、その成果は、1942年に、国立浙東大学編「徐霞客先生逝世三百周年記念刊」として刊行され⁽¹⁹⁾、さらに1948年に「地理学家徐霞客」と題名を改めて、商務印書館から一般向けに刊行された。これはその後陸続と続く、徐霞客研究論文集の第一冊である。丁文江が学術的に優れたテキストを生み出したことが、こうした研究を可能にしたことは間違いない。

その後約五十年間は、丁文江本が底本とされたが、その状況を新たにされたのが、1980年刊行の、褚紹唐と呉応寿による、上海新整理本である。この刊本は、季夢良抄本と徐建極抄本という、新たに発見された抄本に基づいており、丁文江本に至る諸本よりも、(1)全体を通して「日記体」であり、(2)詳細な記述の部分が多くあり、(3)旅の生活の記録が遥かに詳細で具体的なものとなった。遊記の記事も増え、描写も詳細かつ具体的なものとなり、遊記の姿は一変した。

そしてこの上海新整理本が出てから、遊記に対する研究も質量ともに大きく前進することとなった。その成果は、ひとまず呂錫生主編『霞客研究古今集成』(中国書籍出版社、2004)の巨篇に見ることができるが、その後も研究論文集や研究書、また一般向書籍が毎年のように刊行されてきて、現在に至る。

3-2. 各刊本

①. 乾隆刊本(徐鎮初刻本)

乾隆41年(1776)、徐鎮の刊行。

日本では、国立公文書館、東京大学東洋文化研究所など所蔵。

徐鎮は、字は筠峪。徐霞客の族孫であること以外は不詳。

徐序によれば、徐霞客遊記は季夢良の手で編纂され、李寄によって「成書」となったが、刊行

されてこなかった。それが乾隆41年（1775）に楊名時と陳泓による抄本を入手し、これらを元に校勘して完全なテキストを作った。翌乾隆41年に至り、梓に付した、という。徐霞客の死を去ること、135年であった。徐霞客遊記を刊行した、最初の本。

全10冊。

巻首に、徐鎮の序、例言、目次、史夏隆以下校勘者氏名（41名あまり）。以下、ふたつの楊序、陳泓「書手抄霞客遊記後」が置かれる。

各冊（上下）の冒頭に撰者名などを記す。… [] は割注、○○○は校訂参加者で、冊によって異なる。

「江陰徐宏祖霞客著 子〔別姓李〕 寄介立 輯」

「同邑季夢良會明篇 ○○○ ○○○ 重校」

「 楊名時凝齋閱 族孫徐 鎮筠峪 」

本文は、「名山遊記」と「西南遊日記」との区別は設けられていない。これ以後の「徐霞客遊記」の体裁の元となる。

第一冊上：遊天台山日記から遊九鯉湖日記まで、八篇の名山の遊記。

第一冊下：遊嵩山日記から遊恒山日記まで、九篇の名山の遊記。

第二冊上：浙遊日記、江右遊日記。

第二冊下：楚遊日記。

第三冊上：粵西遊日記一。

第三冊下：粵西遊日記二。

第四冊上：粵西遊日記三、四。

第四冊下：黔遊日記一、二。

第五冊上：遊太華山記、天中木花記、遊顔洞記、隨筆二則。滇遊日記二。

第五冊下：滇遊日記三。盤江考。

第六冊上：滇遊日記四。

第六冊下：滇遊日記五。

第七冊上：滇遊日記六。

第七冊下：滇遊日記七。

第八冊上：滇遊日記八。

第八冊下：滇遊日記九。

第九冊上：滇遊日記十。

第九冊下：滇遊日記十一、永昌志略、近騰諸彝述略。

第十冊上：滇遊日記十二。

第十冊下：滇遊日記十三。附、雞山志目、雞山志略一、二、麗江紀略、法王緣起、江源考⁽²⁰⁾。外篇：徐霞客や友人の詩、書簡。陳函輝徐霞客墓志銘、介立公小伝、各種序跋、諸本異同攷略、徐鎮辨義⁽²¹⁾。

②. 葉廷甲本（嘉慶刊本）

嘉慶13年（1808）、葉廷甲の刊行。

日本では、東京大学総合図書館、同東洋文化研究所、筑波大学中央図書館など所蔵。

葉廷甲は、乾隆19年（1754）から道光12年（1832）。字は保堂、号は雲樵、自宅を水心齋と号した。江陰の人。

葉序によれば、嘉慶11年（1806、乾隆本刊行の31年後）、徐鎮が以前刊行した徐霞客遊記の版木を、葉廷甲に寄贈した。そこで彼は、楊名時抄本と陳泓鈔本ともあわせて校勘し、新たなテキストを作成し、嘉慶13年4月に刊行した、という。

乾隆本の版木を利用したため、大幅な改定ではなく、文字の入れ替えや附録部分の改変などの部分的な改修である。

第一葉に「霞客遊記」のタイトルに加え「嘉慶戊辰校補」と「水心齋葉氏藏板」が書かれている。

巻首に、嘉慶戊辰作の趙翼の題辞（五言古詩）、葉廷甲序、四庫全書総目提要が加えられており、それに続いて徐序、楊名時二序、陳泓書後が置かれる。遊記本文の体裁は乾隆本と同じ。最後に葉廷甲の跋が加わる。外篇の他に、徐霞客の遺詩などからなる補篇が加えられているが、錢謙益の「徐霞客伝」は削除、彼のふたつの書簡は無記名で収録されている。

③. 瘦影山房本（光緒刊本）

光緒7年（1881）、上海瘦影山房刊行。

日本では、東洋文庫など所蔵。

②葉廷甲本を重刻したもので、内容はほぼ同じ。新たに幾篇かの詩を加えている。錢謙益の「徐霞客伝」は無記名で巻末に置かれている。

④. 上海図書集成書局本（光緒活字本）

光緒34年（1908）⁽²²⁾、上海図書周成書局刊行活字版。

日本では、国立国会図書館、東京外国語大学など所蔵。

全8冊。

②葉廷甲本を元に、活字版で翻刻したもの。

序文の順番を入れ替えている。錢謙益の「徐霞客伝」は無記名で巻末に置かれている。

⑤. 徐霞客遊記大観本

民国13年（1924）、上海掃葉山房刊行、石印本。

日本では、二松学舎大学、埼玉大学など所蔵。

線装本、全10冊。

②葉廷甲本を基礎に、石印版で印刷したもの。

葉序、徐序、楊序一、陳泓書後、楊序二、徐例言、趙翼題辞の順番。

⑥. 民国初活字本

⑦丁文江本が出る以前に、何種類かの活字本が出ているが、ほとんどが、②葉廷甲本を元にして、幾分かの省略をしている。2点だけあげる。

⑥1. 上海群衆図書公司本

民国13年（1924）、上海群衆図書公司刊行。活字校点本。

日本では、民国15年（1926）の四版を東洋文庫が所蔵。

全4冊。

表紙に「新式標点」と書く。②葉廷甲本を基礎に、活字版で組み、句読点や固有名詩を表す傍線を施す。

校点者は、呉郡の沈松泉。1925年に、張静廬、盧芳らとともに、光華書局を創設している。

梁啓超代序、曹聚仁「徐霞客伝」著者攷証、沈松泉先生新序を、新たに加える。

⑥2. 新文化社本

民国14年（1925）、上海の新文化社からの刊行。活字校点本。

日本では、再版を埼玉大学など所蔵。

表紙には「名著遊記読本」とあり「新式標点シリーズ」のひとつとある。

標点者は鮑賡生、校閲者何銘とあるが、内容と標点を見ると、⑥1上海群衆図書公司本とほとんど同じ。いわゆる海賊版であろう。

⑦. 丁文江整理本

民国17年（1928）、商務印書館から刊行。

日本では、東洋文庫、東京大学東洋文化研究所など所蔵。

丁文江が詳細に校訂し、句読点と固有名詩を表す傍線を施したもので、1980年に上海整理本が出るまでは、徐霞客遊記の最も優れたテキストであった。

丁文江は、光緒13年（1887）から民国25年（1936）。字は在君で、江蘇省泰興県の人。富紳階級の出で、1902年に日本に留学、のちにはイギリスに渡り、動物学や地質学を学び、1911年にグラスゴー大学を卒業。帰国後は、地質学を中心とした研究と教育に携わる。1921年には中国地質学会をたちあげ、副会長に任じた。1931年には北京大学地質系教授となり、1933年には、翁文灝、曾世英らと『中華民国新地図』や『中国分省新図』を刊行。1936年、湖南省で調査中事故に遭い、没。享年49歳であった。

「重印徐霞客遊記及新著年譜序」にいう、刊行までの経緯を若干補いながら以下に示す。

丁文江は海外留学期間が長く、「国書」はほとんど読んでいなかった。欧州から帰り、ベトナムから雲南貴州へ入ったところ、先輩の葉浩吾から、「地学を学んでいるのなら『徐霞客遊記』を読みなさい」と勧められた。翌民国元年（1912）に、上海で④上海図書周成書局本を入手したが仕事が忙しく巻を開くことができなかった。民国3年（1914）に、再び雲南を調査することとなり、東部と北部を二百日あまり旅することとなった。その折り、遊記を開き、自分が目にしているものと比べてみると、「先生精力之富、觀察之精、記載之詳且實」に驚嘆することとなった。「輿地之學」には地図が欠かせないのに、先生は地図無しで地理的事象を見事に描き出している。しかし後人は地図が無いために、この書が地理書として優れていることに思いが寄らず、ただ先生の「文章之奇」のみを賞賛している。そこで遊記の本当の価値を明らかにするには、関連する地図が不可欠であると考えた。そして、民国10年（1921）に至り、ようやく先生の遊歴路線を記した「総図」を作成し、先生の略歴とともに「文友会」で発表した。

そのころ友人の胡適が「章（学誠）実齋年譜」を作った。年譜というものがその人を表すのに適していると考え、徐霞客の年譜作成を志す。江陰の鄭偉三という人物から、徐霞客故居にある「晴山堂帖」全部と、抄本の「徐氏家譜」六冊とを購入、さらに羅振玉・梁啓超・張元濟から明人の詩文集や県志を借り、二ヶ月間「発憤」して、数万言の年譜を完成させた。

年譜を単行で出版しようとしたところ、また胡適が、遊記本文と一緒に出した方がよいと、アドバイスしてくれた。ちょうど沈松泉の標点本⑥1が出たので、それに倣って聞齊・趙志新・方壮

猷らとともに、諸本を参考に本文の標点を行った。また地質調査所所蔵の地図などを下敷きに、諸友人の助けを借りながら、36枚の名勝地図を作成した。これら遊記本文、地図、年譜をあわせて、民国16年（1927、丁文江41歳）に刊行に至った。

以下、丁文江整理本の内容を記す。

冒頭に、胡適が申(上海)⁽²³⁾で購入した本に掲載されていた、徐霞客の小像と承培元の賛を掲載。この絵は、咸豊2年（1852）夏に呉儁の手になるもの。この図像を掲載したのは、丁文江整理本がはじめて。

次に潘耒（1646～1708）の序。これは梁啓超が「遂初堂集」（巻七）を読んでいて発見し、丁文江に教えたもの⁽²⁴⁾。徐霞客の西南遊の行程について、他の序跋類の多くが、錢謙益の伝に基づいて、「チベットまで訪れた」としているのに対し、この潘耒の序文のみは、遊記本文の記事から、「雲南に留まり、チベットへは行ってない」としていることを、丁文江は高く評価している⁽²⁵⁾。また潘序は、徐霞客の視点として「先審視山脉如何去來、水脈如何分合」をあげる。この「大地の山脈と水脈を読み取ろう」という視点は、名山遊記の前半には見られず、後半から少しずつ出てくる。西南遊日記に至っては、地脈（龍脈）の探索と確認が、遊行の主要な目的のひとつとなっている。このことは遊記を読めば歴然としており、他の文人の遊記と徐霞客遊記との、大きな違いのひとつとなっている。この潘序の収録も丁文江整理本がはじめて。

以下、丁文江の序文である「重印徐霞客遊記及新年譜序」、丁文江作成の「徐霞客先生年譜」、「徐霞客遊記附図」三十四図が置かれ、次に「遊記」本文、20巻。

巻一：遊天台山日記から遊九鯉湖日記。

巻二：遊嵩山日記から遊恒山記。

巻三：浙遊日記、江右遊記

巻四：楚遊日記

巻五：粵西遊日記一

巻六：粵西遊日記二

巻七：粵西遊日記三

巻八：黔遊日記一、二

巻九：滇遊日記一（缺）遊太華山記、滇中花木記、遊顔洞記、隨筆二則、滇遊日記二

巻十から巻十八まで：滇遊日記三から同十一まで各一卷。

第十九巻：滇遊日記十二、十三

第二十巻：外編：詩文、題贈、書牘、伝誌、家祠叢刻、旧序、校勘

各巻ごとに頁が打ってあるが、全体を通しての頁は付されていない。

「国学名著珍本彙刊」（鼎文書局、1972）など、数多くのリプリント版が作成されており、その際、通し頁が追加されているものもある。

⑧. 万有文庫本

民国18年（1929）、商務印書館から刊行。⑦丁文江整理本の翌年である。

万有文庫は、商務印書館を主導した王雲五（1888～1979）が企画した叢書。古今の様々な分野の書籍を、廉価な印刷方法により、大量にまとめて刊行したもの。一万冊をめざし、民国18年

に第一集千種二千冊、同213年に（1934）第二集七百種二千冊を刊行した。第三集の刊行も計画されたが、戦局の悪化などにより中止となった。戦後王雲五は台湾に渡り、既刊分からダイジェストした「万有文庫薈要」「人人文庫」などを刊行している。

徐霞客遊記は「国学基本文庫」の「歴史 地理類」に、JW10099の番号を付されて収録されている。⑦丁文江整理本、を活字を組み直してリプリントしたもの。図版と地図は省かれる。

再版版（1934）を、横浜市立大学学術情報センター等所蔵。

「国学基本叢書」「萬有文庫薈要」など、数多くのリプリント版が作成されており、⑩の上海新整理本が出るまでは、⑧⑨が、基本的テキストであった。

⑨. 劉虎如選注本

民国18年（1929）、商務印書館が「学生国学叢書」の一部として刊行。

見開きに「選注者 劉虎如、主編者 王雲五・朱経農」とある。

序跋の類は一切無く、冒頭に「一九二七、十一、十九」の日付がある、劉虎如自身の「序」がある。それは「徐霞客之生平」「徐霞客之家系」「關於地理之供献」「徐霞客之著作」の項目からなる、遊記の解説である。「關於地理之供献」は、さらに「(1) 對於中国山脈之供献」「(2) 對於中国河流之供献」からなり、遊記本文以外の溯江紀源や盤江考なども引用しながら、徐霞客遊記の価値を「山脈」と「水脈」の二点から説明している。

遊記本文は、名山遊記のみで、西南遊は載せない。附録は、盤江考と江源考（溯江紀源）の二篇のみ。

日本では、東洋大学附属図書館が所蔵。内容が同じである「新中学文庫」版もあり、初版は同じ1929年。第三版（1947）を埼玉大学が所蔵。

さらに近年、劉虎如選注本を、横書き簡体字でリプリントしたテキストが出版された（崇文書局、2014）。「民国国学文庫」という、商務印書館「学生国学叢書」を現代によみがえらせようという叢書のひとつとして刊行されたもの。王美英による校訂が施されているが、劉序・遊記本文とも、学生国学叢書本を踏襲している。この本も、埼玉大学が所蔵。

⑩. 上海新整理本

1980年、上海古籍出版社から刊行。徐霞客遊記の姿を一新した校本である。

縦書き繁体字。

図版として、呉儁徐霞客像、徐霞客手蹟、季会明抄本と徐建極抄本の写真、その他徐霞客が訪れた名勝の写真が18枚。徐霞客旅行路線図1枚。遊記本文中にも、「天下名山勝概記」や「古今圖書集成」から山岳などの絵図を挿入している。

解説の文章は、地図の後から始まり、上海古籍出版社による前言、校点説明、目録、図版目録。

冒頭の序文は、季序、徐序のみ。他の序跋は卷十下の「附篇」に収録。末尾に丁文江の「徐霞客先生年譜」を置く。

整理者は、華東師範大学の褚紹唐と復旦大学の呉応寿である。1976年に遊記の標点整理に着手した両者は、北京図書館所蔵の抄本が、抄本①2の季会明抄本の転写本であり、遊記の本来の姿を留めるものであると判断した。文字の瑕脱が多く、良質の抄本ではないものの、(1)「乾隆本が随所で総合的な記述になっているのに対し、全体を通して『日記体』であること」、(2)「乾隆本よりも記述が詳細な部分が多くあること」、(3)「霞客の旅の生活の記録が、乾隆本よりも遥かに

詳細で具体的であること」から、これこそ「遊記の原始抄本」であろうとした。ただし、この抄本は、西南遊日記のうち浙遊、江右遊、楚遊、粵西遊の部分のみである。また、私蔵の④2徐建極本についても、内容が詳しい原始抄本であるとした。この抄本は、黔遊と滇遊部分のみである。そこで褚紹唐らは、名山遊記部分は乾隆本を、浙遊日記から粵西遊日記は季会明抄本を、黔遊日記と滇遊日記は乾隆本をそれぞれ底本とし、徐建極抄本など諸抄本を参照して整理本を作成した。遊記の文章は、約60万言となり、西南遊の部分もほとんど切れ目ない「日記」の姿を現した。

これ以後も、おびただしい数の「徐霞客遊記」が刊行されているが⁽²⁶⁾、そのほとんどは、この⑩上海新整理本を使ったものである。

この本の補足的な書籍として、次の二点がある。

⑩補1. 徐霞客遊記人名地名索引

1993年、上海古籍出版社から刊行。馮菊年、蕭琪編。

上海新整理本の、人名と地名の索引。四角號碼順。

2011年、上海世紀出版社刊行の、上海新整理本には、この索引が附載されている。

⑩補2. 徐霞客旅行路線考察図集 = The atlas of Xu Xiake's travels

1991年、中国地図出版社刊行。褚紹唐主編。

徐霞客の旅行路線を描いた地図。総図及び見開きの中図で、45幅。細部を描いた小図をあわせると全70幅。見開きの中図は、簡略ながら等高線が記されていることから、徐霞客遊記以外の資料の検討の際にも、しばしば利用される。

⑪. 全訳本

徐霞客遊記を中国語に全訳したものは、これまで三種類ある。

⑪1. 徐霞客遊記全訳（朱惠栄全譯本）

1997年、貴州人民出版社から、中国歴代名著全譯叢書のひとつとして刊行。

訳者は、雲南大学の朱惠栄をチーフとするチーム。

横書き簡体字。全四冊。

冒頭に、朱惠栄の「前言」があり、1994年4月の摺筆という。小見出しをあげれば「《徐霞客遊記》是導遊手冊」「《徐霞客遊記》是地学百科全書」「《徐霞客遊記》是歴史実録」「《徐霞客遊記》是文学名著」「《徐霞客遊記》的版本」

訳注の対象は、遊記全文、及び滇遊日記一に代わる遊太華山日記、滇中花木記、遊顔洞記、隨筆二則。さらに盤江考、永昌志略、近騰諸彝説略、雞山志目、雞山志略一、二、麗江紀略、法王縁起、溯江紀源（江源考）である。

各巻篇毎に、先ず路線図が置かれ、次に当該部分の概説をする「題解」が記される。本文は、適当な分量毎に区切られ、「原文」「注釈」「訳文」の順で記す。

⑪2. 新譯徐霞客遊記（黄坤新譯本）

2002年、台湾の三民書局から、古籍今注新譯叢書地志類のひとつとして刊行されたもの。

黄坤注譯、黄志民校閱。縦書き繁体字。全三冊。

冒頭に、黄坤の「導讀」があり、「《徐霞客遊記》版本源流表」「徐霞客旅遊路線図」が掲げられた後に、訳注が始まる。

訳注の対象は、遊記全文、及び滇遊日記一に代わる遊太華山日記、滇中花木記、遊顔洞記、隨筆二則、さらに盤江考、永昌志略、近騰諸彝説略、雞山志目、雞山志略一・二、麗江紀略、法王

縁起、溯江紀源（江源考）である。他に附篇として詩文、伝誌、舊序を、上海整理本より抜粋で載せるが、本文のみで、訳注は施していない。最後の徐霞客年譜はオリジナルなもので、丁文江のものよりも簡略である。

各巻篇毎に、冒頭に当該巻の概略を述べた「題解」と地図が置かれ、巻末には遊記の内容解説から読み取った事柄を「評析」として載せる。かなり長文である。

各巻内は、適当な分量ごとに「章」として区切られ、「本文」、当該部分の概略である「章旨」、「注釋」、「語譯」の順で記す。

①3. 徐霞客遊記（両朱全訳本）

2015年、中華書局から、中華經典名著全本全注全訳叢書のひとつとして刊行されたもの。

訳者は、朱恵栄と朱興和の二名連記だが、朱恵栄の「前言」によれば、「訳文」は李興和がひとりで担当したという。横書き簡体字。全四冊。

①1のリニューアル本といえる。

冒頭に、朱恵栄の「前言」があり、2014年9月の摺筆という。小見出しをあげれば「奇人徐霞客」「奇書《徐霞客遊記》」「中華伝統文化養育的徐霞客」「《徐霞客遊記》的版本」である。①1とは、かなり視点が異なることがわかる。

訳注の対象は、①1とまったく同じ。「訳文」は李興和が担当したというが朱恵栄が責任者であった①1の訳文について、新たな知見や現代地名の変化などを李興和が変更したのであろう。

各巻篇毎に、先ず路線図が置かれ、次に当該部分の概説をする「題解」が記される。本文は、適当な分量毎に区切られ、「原文」「注釈」「訳文」の順で記されるのも①1と同じ。

注

- (1) リプリント版があるのは、「葉葳楊序本」（無錫文庫所収）と「四庫全書本」の二種類のみである。
- (2) 主には、下記を参照した。上海新整理本の前言（1980）、唐錫仁・楊文衡『徐霞客及其遊記研究』（中国社会科学出版社、1987）、朱恵栄『《徐霞客遊記》的版本』同『徐霞客与《徐霞客遊記》』（中華書局、2003）所収、褚紹唐『《徐霞客遊記》版本源流概述』（呂錫生主編『徐霞客研究古今集成』中国書籍出版社、2004、以下「集成」）所収、野間晴雄・松井幸一・齋藤鮎子『『徐霞客遊記』の行程・観察記録の書誌的検討と史料の意義：福建省歴史GIS構築のための基礎的検討（1）』『関西大学文学論集』62巻（2号）（2012）。
- (3) 名山遊記は、おおむね短編で、17篇全てあわせて、「西南遊日記」一卷分しかない。また、名山遊記は、後半には「線的」記述や「面的」地理把握の視点が見られるようになるが、基本的には、ひとつの山岳という「点」についての「遊」の「記録」である。一部を除き、基本的にはそれぞれの「遊記」は独立しており、連続性はない（連続するものは、ふたつの「遊天台山日記」と「遊雁宕山日記」、「遊白岳山日記」と「遊黄山日記」、「遊嵩山日記」と「太華山日記」と「太和山日記」、「遊五台山日記」と「遊恒山日記」。）それに対し、「西南遊日記」は、四年間にわたる「遊」の「記録」が、原則として途切れることなく続く。また、自らがたどる「ルート」としての「線」、また河川や山脈の「線」が意識され、さらにはそれら多くの「線」がつくる「面」が描かれる。こうした、分量以外の内容上の違いが、「名山遊記」と「西南遊日記」には見られる。
- (4) 例えば、「楚遊日記」3月27日条に、永州南部の洞穴をランクづけた「永南洞目」がある。そこでは徐霞客が入洞し、記すに足る景勝がある洞穴を12箇所あげる。しかしこのうち大佛嶺側巖と月巖南嶺水洞は、上海新整理本には全く記載がない。また麻拐巖も、名前だけは記載があるが、入洞の記事はない。洞目にあげられている以上、徐霞客自身が入洞し、記録したものと推測される。元々は記事があったのが、伝写の過程で失われたものだろう。
- (5) 季序では「冢君」とある。これは本来は、君主に対する敬承であるが、「冢子（あとづぎ）」の意味で

用いているものと判断した。

- (6) 以下、本節の引用は、季序より。
- (7) 彼は、徐霞客が西南遊に旅立つ前に、送別の宴を開いている（「浙遊日記」）。
- (8) 呂錫生主編『徐霞客家伝』（吉林文史出版社、1988）に引く「民譜」（第十七世、徐弘祚、〔附〕徐亮工）によれば、7月15日のこと。実際には清軍が江陰に侵攻し、抗清活動を行っていた人々を滅ぼしたことを指す。「民譜」には、李兆洛の「忠義亮工公伝」という文章を載せており、亮工が江陰城攻防戦で戦死したという。なお「民譜」は「因国変、一門五人同日遇家難」とぼかし、季序も「盗所殺」とすり替えているのは、清朝統治下にあつて、明清交代期に清軍が虐殺を行ったことを書くのを避けたのであろう。このとき、霞客の長子徐岷も亡くなっている。
- (9) 仲昭とは、霞客の族兄で、旅路をとにもすることも数多くあつた、徐遵湯のこと。
- (10) 朱惠榮は、さらに曹写本は、康熙23年に、李寄の手に渡つたというが、「史序」に「甲子歲清和月、率其子、拜授原書」とあるのは、史夏隆校訂の本ではないか。
- (11) 前掲注（8）。
- (12) 奏銷とは、清代の制度で、官庁が一年間の収入・支出の決算を中央政府に報告するもの。順治18年1月康熙帝が即位。しかし国家財政が逼迫する中で、税の未納が多かつた。当時の江蘇巡撫の朱国治は、未納を厳しくとりしめし、違反者を次々と逮捕投獄、それは14000人に及んだという。多くの人士が、このために前途を断たれたが、呉三桂のもとに走り、その幕僚となつた方光琛もそのひとり。佐伯富「清代における奏銷制度」（『東洋史研究』第22巻第3号、1963）参照。
- (13) この書簡の書き手は錢謙益。「伝」も錢謙益の「徐霞客伝」。両文章とも、上海新整理本は附篇の「詩文・書牘」に収録。
- (14) 季会明の文章は、上海新整理本では「滇遊日記一」の冒頭に収録。曹宸采小記は不詳。
- (15) 季会明の文章は、上海新整理本では「滇遊日記十三」の末尾に収録。
- (16) 「本邑馮志」は、馮士仁撰「〔崇禎〕江陰県志」。「靖邑陳志」は「靖江県志」だろうが、陳某の明末刊本は伝わらない。
- (17) 魏子雲「《徐霞客遊記》の康熙抄本」『徐霞客逝世360周年紀念文集』2001年、古今集成再録。
- (18) 咸豊刊本の存在は、丁文江が胡適から借りて、徐霞客の画像を自身の刊本に掲載してという記述（丁文江序）から確認できるが、今は中国でもその存在は不明らしく、朱惠榮などもその所在を明記しない。
- (19) 「民国叢書」（上海書店、2011）第一編に影印版所収。
- (20) 抄本時代は「溯江紀源」という名の小文が、乾隆刊本では「江源考」の名に変わっている。「溯江紀源」は、長江の淵源について、「禹貢」の「岷山導江」を否定し、崑崙山だと主張する。清初の地理学者である顧祖禹は、康熙17年（1678）頃に一応成書したと考えられる『讀史方輿紀要』の中で、徐霞客の説を「迂誕之説」と痛烈に批判している。胡渭も、康熙36年（1697）成書の『禹貢錐指』で、わざわざ「論江源」の一文を設け、「霞客不足道」と退けている。清初のそうそうたる地理学者から、徐霞客の「溯江紀源」は手厳しい批判を浴びているので、同名で掲載するのははばかられ、名を「江源考」と改めて収録したのではなかろうか。
- (21) 錢謙益の書簡や「徐霞客伝」は、収録されてはいるが、名前の欄が黒塗りとなっている。錢は晩年に清朝批判の詩を書いた。その精神が流行するのを嫌つた乾隆帝は、錢の著述を廃棄し、禁書扱いとする詔を下す。乾隆34年（1769）のことである。既刊書も、当該部分を抽出して廃棄する「抽禁」処分にあつた。小説集「虞初新志」に収録されていた「徐霞客伝」も抽禁処分がなされているという（成瀬哲生「抽禁処分と『虞初新志』—異本新考—」『新しい漢字漢文教育』第40号、2015）。その後刊行された『虞初新志』では、「徐霞客伝」の本文を収録しながら、撰者を「王思任」に変えている。乾隆刊本の刊行は、禁書の詔の、わずか7年後である。名を伏せての収録であるが、危険なことであつた。後述する嘉慶刊本では、錢謙益の書簡は名前の欄が空欄で収録されているが、「徐霞客伝」は割愛されている。
- (22) 国会図書館書蔵本では刊行年を明記せず、同目録は「清季」とのみ記すが、東京外語大学所蔵本によ

れば、光緒34年の刊行。

- (23) 申は、上海の別称。戦国春申君の領地であったことからの称。
- (24) 譚其驥『清人文集地理類匯編』第六冊（1990、浙江人民出版社）にも所収。
- (25) 徐霞客の事績を語る際によく用いられるのが、錢謙益の「徐霞客伝」である。これは崇禎16年（1643）刊行の「牧齋初学集」に収録されている。錢謙益の「伝」は、同15年（1642）に書かれた、陳函輝の「霞客徐先生墓志銘」をほとんど踏襲している。しかし、本稿で見てきたように、遊記の本格的な抄本である季会明本は、明清交替の戦乱の中で紛失しており、多くの人が手本とした李寄本は、清の康熙年間の作。さらに刊本は乾隆後半期まで出されなかった。つまり、陳の墓碑銘も錢の伝も、徐霞客遊記の本文を見ることなく書かれたものということになる。両書では、徐霞客がチベットへ行つたと記すが、遊記の本文を見ると、西南遊日記はほぼ切れ目無く綴られており、雲南から域外へ出て、チベットまで行く時間的余裕は全くない。潘の指摘は妥当である。
- (26) 例えば、2016年だけでも、『徐霞客遊記（上下）（精編本）』中国旅遊出版社、馬連湘等『徐霞客遊記詞匯研究』人民日報出版社、『徐霞客遊記（国学經典誦讀叢書）』21世紀出版社、董仁威『《徐霞客遊記》解讀』清華大学出版社、鄭培凱『徐霞客遊記（中信国学大典）』中信出版社、蘇曉峰訳注『徐霞客遊記—中華传统文化經典普及文庫』中国工人出版社、『徐霞客遊記全鑑』中国紡績出版社他が出版されている。

（以上）

（2017年3月27日提出）

（2017年4月17日受理）